

聖書メッセージ 人は自分を知恵者と思う

伝道者の書 9章13～18節、10章1～20節

- 9:13 私はまた、知恵について、日の下でこのようなことを見た。
それは私にとって大きなことであった。
- 9:14 わずかの人々が住む小さな町があった。
そこに大王が攻めて来て包囲し、それに対して大きな土塁を築いた。
- 9:15 その町に、貧しい一人の知恵ある者がいて、自分の知恵を用いてその町を救った。
しかし、だれもその貧しい人を記憶にとどめなかった。
- 9:16 私は言う。「知恵は力にまさる。
しかし、貧しい者の知恵は蔑まれ、その人のことばは聞かれない」と。
- 9:17 知恵のある者の静かなことばは、愚かな者の間での支配者の叫びよりもよく聞かれる。
- 9:18 知恵は武器にまさり、一人の罪人は多くの良いことを打ち壊す。
- 10:1 死んだハエは、調香師の香油を臭くし、腐らせる。
少しの愚かさは、知恵や栄誉よりも重い。
- 10:2 知恵のある者の心は右を向き、愚かな者の心は左を向く。
- 10:3 愚か者は、道を行くときにも思慮に欠け、自分が愚かであることを、皆に言いふらす。
- 10:4 支配者があなたに向かって立腹しても、あなたはその場を離れてはならない。
冷静であれば、大きな罪は離れて行くから。
- 10:5 私は、日の下に一つの悪があるのを見た。それは、権力者から出る過失のようなもの。
- 10:6 愚か者が非常に高い位につけられ、富む者が低い席に座しているのを、
- 10:7 また、奴隷たちが馬に乗り、君主たちが奴隷のように地を歩くのを、私は見た。
- 10:8 穴を掘る者は自らそこに落ち、石垣を崩す者は蛇にかまれる。
- 10:9 石を切り出す者は石で傷つき、木を割る者は木で危険にさらされる。
- 10:10 斧が鈍くなったときは、刃を研がないならば、もっと力がある。
しかし、知恵は人を成功させるのに益になる。
- 10:11 もし蛇がまじないにかからず、かみつくなれば、それは蛇使いに何の益にもならない。
- 10:12 知恵のある者が口にする事ばは恵み深く、愚かな者の唇は自分自身を?み込む。
- 10:13 彼が口にする事ばの始まりは、愚かなこと、彼の口の終わりは、悪しき狂気。
- 10:14 愚か者はよくしゃべる。人はこれから起こることを知らない。
これから後に起こることを、だれが彼に告げることができるだろうか。
- 10:15 愚かな者の労苦は、自分自身を疲れさせる。彼は町に行く道さえ知らない。
- 10:16 わざわいなことよ、あなたのような国は。
王が若輩で、高官たちが朝から贅沢な食事をする国は。
- 10:17 幸いなことよ、あなたのような国は。王が貴族の出であり、
高官たちが、酔うためではなく力をつけるために、定まった時に食事をする国は。
- 10:18 怠けていると天井が落ち、手をこまねいていると雨漏りがする。
- 10:19 パンを作るのは笑うため。ぶどう酒は人生を楽しませる。金銭はすべての必要に応じる。
- 10:20 心の中でさえ、王を呪ってはならない。寝室でも、富む者を呪ってはならない。
なぜなら、空の鳥がその声を運び、翼のあるものがそのことを告げるからだ。

人は自分を知恵者と思う

伝道者の書9、10章より 2021/10/24

I. 愚かさの原因 = 「神は存在しない」という間違った前提 (「日の下」28回)

1. 「罪」(原語「的外れ」)

藩(君主)のため ⇒ 国(天皇)のため ⇒ 自分のため

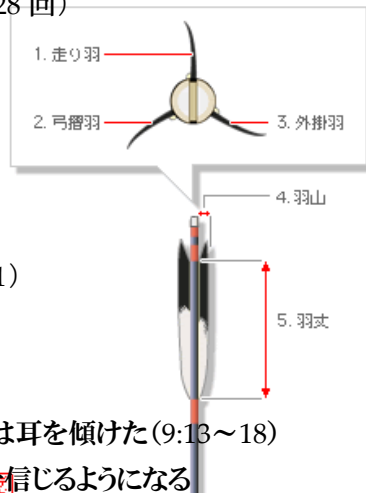
「人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶこと」

(ウェストミンスター小教理問答)

2. 人にはもともと外的から逸れる性質が備わっている(罪)

罪 = 愚かさ「愚か者は心の中で『神はいない』と言う」(詩篇 14:1)

「愚かさ」とはIQ(知能指数)ではなくGQ(神指数)の低さのこと



II. 愚かさの実例

1. 貧しい知恵者の知恵をかき消し、愚かな支配者のスローガンに人々は耳を傾けた(9:13~18)

人は自分の聞きたいことに耳を傾ける 繰り返せば大衆は嘘を信じるようになる

2. 死んだハエ(10:1)

白い恋人、赤福、船場吉兆(消費期限ごまかし、料理の使い回し)

小さい偽り、油断、臆病が、栄光と栄誉を台無しにする。

小さな罪でも、ただちに神との交わりが遮断される！(いのちのない信仰生活)



3. 知恵者は右(栄誉)、愚か者は左(恥と不名誉)に惹かれる(10:2)

『八甲田山 死の彷徨』(新田次郎) 過ちを認める勇気がなかった
<リングワンデリング現象> ガス・吹雪・濃霧・暗夜などに見まわられて方向感覚を失い、自分は真っ直ぐ進んでいるつもりでもだんだんと左または右へずれていき同じ所を大きな円を描くようにぐるぐる歩き回ること。



1902年(明治35年)1月23日、青森県の八甲田山にて、雪中行軍の演習210名中199名凍死、生還わずか11名

4. 愚かな権力者が、この世の秩序をくつがえす(10:4~7)

「愚か者が非常に高い位に、富む者が低い席に」

ロシア革命、文化大革命、カンボジアの悲劇 —— 社会を導き、支える人々を抹殺

5. 人の愚かさを直してやろう、と思うと大けがをする(10:8~11)

穴に落ち、蛇にかまれ、石で傷つき、木で危険な目に遭う

自分は「町に行く道さえ知らないのに」「これから起こることを何も知らないのに」

しかし、知恵のある者の恵み深いことばは人をいやす

「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(マタイ 11:28)



III. 愚かさからの脱出 (10:16~20)

1. 愚かなリーダー(自分)から、賢いリーダー(キリスト)へ キリストを主として従う(人生の軌道修正)

2. キリストは十字架で私たちの身代わりに呪われ、愚か者のように死んでくださったことを知り受け入れる

「この知恵を、この世の支配者たちは、だれ一人知りませんでした。もし知っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。」(Iコリント 2:8) 聖書の中心=十字架と復活

3. 日常を丁寧に生きる (私たちは自分で生きているのではなく、生かされている)

私たちの生活の中に「死んだハエ」はいないか。

